



Fallen Blade

フォールン・ブレイド

ADULT
R18
18才以上のみ対象



「はあああっ!!!」

世界の再生が行われて
しばらくした後:

女性型のブレイドが
消息を絶つという
事件を聞き:

ヒカリちゃんと二人で
調査に来たのですが:

謎の軟体生物に
攻撃を受け
ヒカリちゃんと
はぐれてしまいました



レックス:



そして私は:

「はあ……はあ……」

囚われた私は
何とか脱出を
図ろうとしたけど

触手の拘束はとても強く……
脱出できそうも
ありませんでした

この生物の体内だと
力が使えない……

体もなんだかおかしい……
次第に熱く……なって来てる……

私を拘束してるこの触手……

まさかブレイドの力を
封じ込める何かを
持っているというの……?

それに……この触手……っ!!

「やっ……んんんんんん破いちゃ……!!」

さつきからエッチな
ことばかり
してくる……っ!!

「だめっ敏感に
なってるの……!!」

「こんな……っ
いやあ……っ!!」

「……っ!!」

「……っ!!」

「……っ!!」

「……っ!!」

「……っ!!」

「……っ!!」

「……っ!!」

そしてそれは
突如に始まりました

「え……？」

「な、何をするつもり？」

「まさか？」

「だめ！来ないで！」

先端に宝石を
付けた触手は…

私の大事な所を
押し開き…

「いやっ！！」

…あっさりと
私の純潔を奪って
いったのです

——その奥にある
私たち女性にとって
最も大事な場所

「子宮」の入り口に
到達し——

レックスに
捧げたかった純潔

そんな私の願いを
踏みじった触手は——

ゆるさない…

こんな…
触手なんかには…

絶対に…

さらなる略奪を

「ゆるゆる……な……」

「ん……ん……」

「あ……」

「え……？」

「あ……あああああ……」

——始めたんです——

体内のエーテルが……

強制的に……
吸い取られ……て……！！

だめ、何かが……来ちゃう！！

その快楽は私を生まれて初めての絶頂を迎えさせるには十分すぎる衝撃でした

女性型ブレイドの子宮はコアと密接な関係にあり

大量のエーテルが蓄えられています

その大量のエーテルをブレイドから分解し一気に奪って来る謎の力に

私の胸元のコアには亀裂が走り

エーテルで作られた私のスーツも子宮付近から弾き飛ばすように四散していったのです



「だ…め、ドンドン
吸われて…
い…くうッ!!」

吸われれば
吸われるほど
絶頂させられ

私は抵抗する力を
奪われていきました
吸われるたびに
来るこの快楽…

入らな…っ!!
「…いやあああっ!!」

触手は固く閉ざされた
子宮口を難なく突破し…

とても…

耐えきれ…

な…い!!

さら…

「だめ、そこはっ!!」

その奥に眠る
エーテルを奪うため
吸引を強めてきたのです

無防備な子宮内部
触手が向かった先は
「卵巣」でした

卵子はエーテルの塊

それを
エーテル
操作によって

『強制的に排卵』

卵巣から
分離させてきたのです

その全てが!!

「あー」
「嘘……こんなの……」

子宮から無理やり
卵子を分離させられてる
私は小刻みに震えてました

「排……卵……させら
れ……てる……!!」

「そん……な……」

子宮の数倍以上の
エーテルの塊

それを奪われたら……
私は……もう……

敗北してしまう……

ブレイドとしての力……
女としての尊厳……

「まさか……」

「やめて……」

「それ……だけは……」





「お母さんお母さん」

「お母さん」

「奪い尽くされる」

「お母さん」

「お母さん」

ブレイドとしての力の大半を奪われても尚触手たちは私の体からエーテルを貪っていました

アソコは子宮口が露出するほど捲れてしまい……

砕けたコアは5分の1ほどの触手に吸収されて……

「は……は……は……」

胸からはエーテルの混じった母乳がだらしなく吹き出すように開発され

断続的に来る絶頂と吸収に耐えていました

「レ……ックス……」
——きつと助けに来てくれる——

必死に私は自分にそう言い聞かせ諦めませんでした

突如、アソコを蹂躪していた触手が引き抜かれたのです

おぞましいほどの快楽の衝撃

コアがさらに砕けた私の目の前に——

「ひっ……う……う……!!!」

「はあ……はあ……はあ……」

「真の凌辱者」が姿を現したのです——



捕らえたブレイドの力を奪うだけではなかったのです…

この魔物の「目的」

獲物の生存本能を掻き立て意図的に排卵させるため

膣をめちゃくちゃに広がるまで捲り上げたのもこれから何度もここを通過させるため…



そして… この魔物の精液…

「化け物の…精子…?」

でもこの液体の中で泳いでいる精子は…

肉眼でも見えるほどの異常な大きさ…

「嘘…そんな…」

人の精子は卵子よりはるかに小さい事くらい

私だって知ってる

「まさか…」

…つまり 今までの行為は種を植え付けるための前座でしかなかったのだ

そして今 準備は整ったのだ



迫ってくる触手からおぞましい数の精子が見える…

この時ようやく私は気づいたのです…

この触手の真の目的に

「いや…来ないで…」

「いやああ…」

私を「苗床」にするのだと いうことに…

無理やり
捻じ込まれてくる
いびつな生殖器

「あが…っ!!!」

私の腕くらいある
その生殖器は

アソコが裂けるんじゃないかと思えるくらい
強引に入ってきました

今射精されたら—

「だめ…っ
卵子…卵子はダメえっ!!!」

「エーテル…っ
残っていないからあつ!!!」

精液を浄化できない…

避妊が…出来ない…

確実に「孕んでしまう」

あつという間に
子宮口を貫き…
叩きつけてくる触手に
成す術もなく
犯される…

それほどまでに私の
力は奪われて
いたのです

クッ!!!

ズ!!!

「アッ!! や!! ああッ!!」

ボッ

「産みたくない...ッ!!」

「こんな化け物の赤ちゃん...ッ!!」

産みたくないのに...
アソコが...私のアソコが
もう...受け入れる
準備しちゃってる

「アッ!! ああッ...!!」

赤ちゃんの部屋...
無理やり...
入ってきてる...

クッ!!!

クッ!!!

来ないで...

来ないで!

『来ないでえっ!!』

『お願い!!』

『誰かあッ!!』

必死に懇願する私:
でも...そんなことは
無意味だった...



『助けて…っ!!』

『レックス—っ!!』

吐き出された精液は
あつという間に
子宮を満たし
私の体を激しい
絶頂へと誘いました

「あ…」

そして…

エーテルの大半を失った
私の子宮ではその絶望的な
までに荒れ狂った精液の
奔流を拒むことはできず…

あっという間に
卵管で漂っている
私の卵子たちを
取り囲んで来たのです

卵膜は成す術もなく
突き破られ

大量の精子が
卵核に喰い付き—

「~~~~っ!!」

卵子の中にある大量の
エーテルが奪われ
味わったことのない
虚脱感と絶頂が何度も
私を襲った直後—

私はブレイドとして
女として
完全な敗北を…
理解したのでした—

クキ

あれから数時間が経過し…

受精卵は私の子宮の
エーテルを餌に
次々と成長し

— 彼らは —

産まれてきました

何度も

クキ

クキ

クキ

クキ

何度も

何度も何度も…

孕まされては産まされ…

私の子宮…

もう…

壊れ…ちゃ…

クキ

クキ

クキ

クキ

クキ

クキ

ゴキウ

その後も
怪物を産まされ
続け――

百匹近い
数の怪物を
出産しても尚

私は…犯され
続けていました…

コアクリスタルは損傷しても
「扉」からエーテルを
取り出す力は残っており…

簡単に消滅できない
「天の聖杯」である私は…
彼らにとって都合のいい
「苗床」だったのです

「レッツ…クス…」

「ビ…カリちゃん…」

蠢く怪物を胎で
感じながら…

私は大切な人達の名前を
ただ呟いていました…



「ライトニングバスター！」

ホムラとはぐれて
かなりの時間が経過し：

私は何とか逃げながら
軟体生物の攻撃を
凌いでいたものの

来た道も分からなくな
ってしまい

焦りを覚えていた

ブレイドの私だけじゃ
厳しい…

やっぱりレックスを
連れてくるべきだったわ

早くホムラを
見つけないと…！

そんな私の目の前に
現れたのが…

はぐれたホムラだった…

「無事だったのねホムラ!」

何か様子がおかしい…
でも：無事だったことに、
私は安堵した

「ちょ、ちょっとなんて
格好してるのよ!!」

「とりあえず
見張ってあげるから
服を修復しなさい」

「ほ…」

「ヒ…カリ…ちゃん!」

「フツフツ
言っていないで
早くしてよね」

「まだ?」

「ちょう…だい…」



全部

ユアのエネルギーが
暴走させられてる
——っ!!



なに……?



真か……

……



「私ね、欲しいの……
ヒカリちゃんのエーテルが……」

「頂戴……」

「ヒカリちゃんの……力……」

動け……ない……

「やあ……やめなさい……」

「ふ……り……な……き……」



「コアの…一部を壊したわ…」

「これでもう…力は使えない…」

ホムラ…
じゃない…!?

改めて見ると
はつきりとわかる…

「ほら…この子たちも早く味わいたいって言うてるわ」

「ピカリちゃんの膣内を…」

「えっ!」

「ホムラ…」

足元から
広がる気味の
悪い触手たち…

操られている
わけではない

でも…私の知ってる
ホムラでもない…

こいつは「ホムラ」に
似た別の何かだと…

「はっ」

「はっ」

「はっ」

「はっ」

「ホムラに…何をしたの?」

「ホムラ…?」

「ああ、オリジナルのことね…」

「な…っ?」

全身を余すことなく
犯し尽くされ
白濁にまみれた
ホムラの姿だった…

「オリジナルの「卵子」と
私の「種」を受精させて」

「小さな私の分身を
沢山孕ませたの」

ズル

「私はオリジナルから
奪ったエーテルで
生まれた」

はぁ

突然巨大な肉の塊が現れ
口を開く…

そこには…

「ああ…ホムラ…」

「こんな…どうして…」

「繰り返し繰り返し…
奪ったエーテルから
情報を得て
「私」という自我を得たの」

「湧き出るエーテルは
私にとって最高の
食事なのだけども…」

「失敗…
やりすぎたわ…」

「力を奪う時コアを
壊しすぎたから…」

「扉が不完全になって
採取できるエーテルが
極端に弱くなったの…」

「丁度…産まれるわ…
新しい私の…一部が…」

「ふふふっ…
また新しい…
一部が…産まれたわ…」

「劣化…した子宮…では
効率が…落ちちゃって…
困って…たの」

ホムラのアソコから
醜い怪物が産まれる

「ホムラっ…
返事をしてー」

「子宮の
エネルギーが少ないと
育つのに
時間がかかっちゃう」

「ホムラっ!!!」

「でも、ヒカリ…
ちゃんが…いる…」

「同じ…白犬の聖杯…
ヒカリちゃん…の力も
手に…入れれば
私は…完全に…なれる」

「ああ…入ってる…
これで…また…近づくん…」

「ん…だから…今度は…」

生ませた化け物と
融合している…!!

「失敗…んっ
…しない」

「は…ふふっ…
ふふふっ」

怪物を取り込んだ途端…
拙かったしゃべり方が
流暢になる…

「進化」しているのだ…

— 恐ろしい速度で —



『今の私には知識がある…』

『ヒカリちゃんは
エーテルを使えない…』

『力が使えなければ
避妊も出来ないわ』

『受精させ放題の
可愛い子袋』

クッ
クッ
クッ

クッ
クッ
クッ



『おふっ…立派な
おちんちんでしょ!』

『今からこのおちんちんが
ヒカリちゃんの子宮を
犯すのよ!』

『…っ!?!』

なによ…これ…

犯される…?!

こんなに
太いので…?!

『安心して…
ヒカリちゃんなら
立派な「ママ」になれるわ』

ホムラに似た「何か」

彼女の顎が頭を撞げ
私の初めてを…

突き破ろうと
していた…

私のアソコに無理やり
捻じ込まれてくる触手

サイズの違いは明らかで
アソコの肉が悲鳴を
上げているのが分かる

「痛…っ!!」

「入らな…からあつ!!」

「女のごこは
そう簡単に壊れないわ」

「あっぶ…!!」

無理…!!
無理いっ!!

「こらやっつ
穴を広げて…」

『ほらっ!!』

♡おちおち♡

おちおち

「いっ!! あああああああああつ!!」

肉の裂ける音と
同時に上がる悲鳴

綺麗に閉じられた
私の処女宮は――

たった一度の侵入で
破壊されてしまった…

「あははは
すっぴんが
ヒカリちゃんの中っ!!」

「やめ……」

「あ、あ、あっ!!!」

「抜いて！
抜きなさいよ……
あぐっ
ひっぐううう!!!」

「何を言ってるの？」

「これからじゃない
私の子作りはね!!」

「あぁっ!!!」

苦しい!!お腹の中を鈍器で
何かで殴られてる
みた……いっ!!!

子宮ごと突き破りそうな
くらい激しい輸送に
私の下腹の肉は
盛り上がってしまった

「そろそろ射精すわよ
たごぷり受け止めなさい!!」
「な……っ?!」

『射精』

死刑宣告に
聞こえたその言葉に
私はあらんばかりの力で
抵抗する

でも、力の落ちた私では
拘束を解くことは叶わず……

「一番奥で出してあげる!!」

「子宮の中で……」

「いやーイヤアアっ
そこは……
レックスの……っ!!!」

「……ね!!!」



流れ込んでくる
精液の濁流

目を見開き、悲鳴を
上げながら私は
痙攣していた

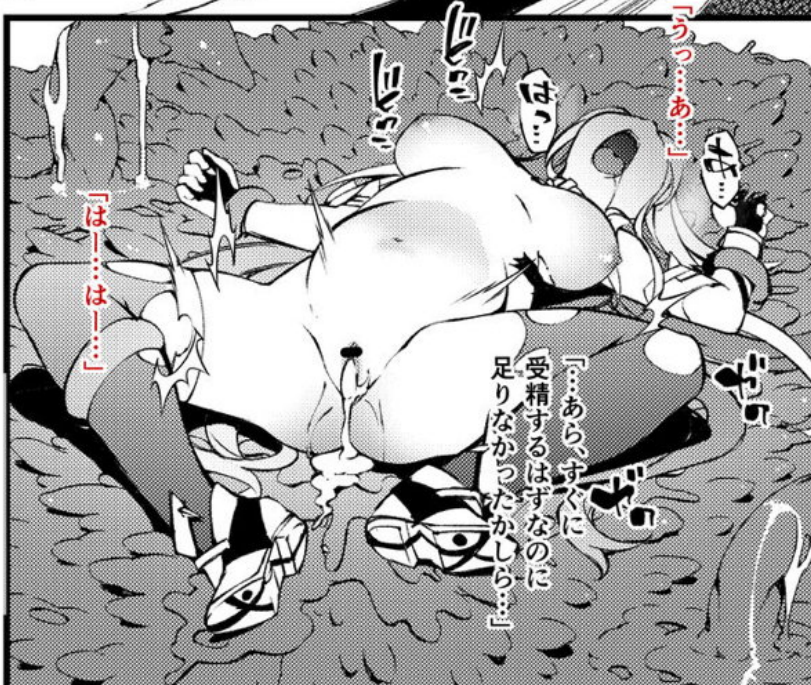
「あははっ!!
沢山飲みなさい!!」

「ほらっ
ほらあつ!!」

「いやああっ…子宮に…
子宮の中に
入ってきてる…!!」

「こんな…
…こんなあ…っ!!」

子宮口を突破した
触手の精液は
あつという間に
子宮を満たしてきた



「私のおちんちんを
受精してれば
良かったのに…」

「気が変わったわ」

「やめ…っ!!」

1本…2本と…
処女を失って
間もないアソコに
無理やり入り込んでくる

「あああああ
あああああ…っ!!」

「ひぐう…っ!
あ…あ…あ…
無…駄よ…っ」

「排卵…だけは…
するもんですか!!」

「今からピカリちゃんの
子宮内で起る
楽しいシヨールを
体験させてあげる!!」

地面のいたる所から
現れてくる触手が
私の大事な場所目掛けて
殺到してくる

「あーっ!!」

「あーっ!!」

「あーっ!!」

容赦なく入り込んでくる
触手は再び最奥である
子宮の中まで入り込んでくる
私は排卵を防ぐために
卵巣にエーテルを
集中させていた

最後まで諦めない…
それがレックス達と
旅を経て得た私の希望

「!?!」

突如頭の中に突如
ビジョンが流れてくる
体の中、子宮の奥…
そして私の最後の誓…

「卵巣」のビジョン

なにこれ…
頭の中に直接…
これって…

しま…っ!!
エーテルの制御が…っ
うあああ…っ!!

抑え…きれ…な…

ただでさえギリギリの所で
耐えていたのに
突然脳内に映し出された
ビジョンと

「あはっ!!」
「排卵したわ!!」
同時に私は惨めに
絶頂した…

子宮壁が突き破られる
と錯覚するほどの
衝撃が私を襲う

「おちゅっ」と…
惨めな敗北の音が
子宮内で響く…

そして排卵を抑えていた
卵巣は制御を失い…

『孕む瞬間をその体で
味わいなさいっ!!』

「あーっ!!」

「あーっ!!」

それはコアを通して
流れ込んでくる
今現在、私の子宮内で
起きている出来事…



「…な、何よ…あれ!」

「あれが全部精子…なの!」

必死に逃げようとするが
私はほとんど動くことが
出来ず、すぐに追いつかれ
あつという間に
囲まれてしまう

我先にと
「私」という卵子に
群がってくる
おぞましい怪物の
姿をした精子たち…

「く…来るな!!」

「この…つ!!」

化け物の姿をした精子は
私を護る
「最後」の砦である
卵膜に牙を立てきた

次々と膜に牙を
立ててくる
異形の精子達

「ああ…そんな…」

力のない膜は一瞬にして
食い破られ、次々と化け物が
私目掛けて殺到してくる

「ぐっ、放しなさい!!」

「いや、いやああああ!!」

化け物たちの波は
私に到達した

そこには受精という
神秘は一切存在しない
異様な光景

「一方的な蹂躪」と
「輪姦」による
「強制受胎」

私の体を飲み込みながら
胎内を犯し尽くしてくる

急速に奪われていく力…

「あああああああああああ…」

今まで味わた
事のない快楽が
絶え間なく
襲ってくる

「あああっ!!」

「いやあっ」

「私の中に
入って来ないでっ!!」

「やっ!!耐えられないっ!!
イク…うイクっ!!
イクッウウウウウウウっ!!」

絶頂で目の前が
真っ白に染まっていく…

そして

意識が戻るとそこには…

「どうだった
ヒカリちゃん？」

「卵子になって精子達に
ぐちゃぐちゃに
犯された気分は？」

「ホムラの姿をした
化け物が満足そうに
微笑んでいた」

「う……あああ……」

受精のショックと
急速にエネルギーを
失った私は
指一本動かせないほど
疲弊していた…

「ちよっと
犯しすぎたかしら」

「これで完全な
力が手に入る…」

「ああ…早く出てこないかしら…」

「ごめん…なさい…」

「孕んだに」

子宮の中で
蠢き始める
無慈悲な胎動…

「ああ…楽しみだわ
ヒカリちゃんから
産まれる力…」

ホム…ラ…

「でも目的は果たしたわ」

だらしなく広がった
秘所からは
吐き出された精液が
溢れかえっており

さっきのまでの凌辱が
嘘ではなかったことを
物語っている

体中のエネルギーが
その胎動の主に
奪われていくのを
感じる…

その事実が
私の心を更なる絶望に
突き堕としていった…

あれから何度も
触手で犯され…

絶頂させられ…

孕まされて…

そして…

6匹目を産んだ頃…

「う…レツ…クス…」

最愛の人の名前を
うわごとのように
呟く私の体は怪物の
精液まみれとなっていた

アソコは囚われていた
ホムラと同じくらい
ひどい有様となり

膣は醜く開き
短時間で複数回
出産も災いして
子宮口も押し出され

羊水と精液が混じった
液体を涎のように
垂らしていた

ホムラに似た怪物は
私から産まれた
5匹を取り込むと

さらにその姿を変えて
私とホムラを
残してどこかに
行ってしまった…

「最後の仕上げをー」
そう言い残して…

その言葉の意味が分からないまま
私の瞳は、壁から出て来た
新たな触手の姿を
ただ見つめる事しかできなかった

おろおろおろおろ!!

ドクドク

ドクドク

ドクドク

ドクドク

ドクドク

ヒカリとホムラが
消息を絶ってしばらく
経過したころ

謎の生物は
ホムラとヒカリ
両方の力を奪い

プネウマとなり
世界中でブレイドを
狩り続けた

彼女の力はあまりにも巨大で
立ち向かったブレイドたちは
次々とその刃を折られ――

――彼女に捕獲されていった

ニアもその一人…

触手で子宮の中を
激しくかき回され
少しづつエーテルを
奪われていた

「嘘…っ!!
中で膨らんで
やだ、出すな!」

下腹の服が破けるほどの
勢いで注がれる精液が
私の子宮に流し込まれる

「やめっ!!」

「あぁあぁっ!!!」

「そこっ…!!!
だめえええっ!!!」

何度も犯され
開発された体では
流れ込んで来る
精液を拒むことはできず

濁流が子宮壁を叩くと
私はあっさりと
絶頂を迎えてしまった

「や…出て…る…」

また、イカされた…
エーテル…が…
なくなっちゃう…

子宮を汚した凌辱者達は
次の標的を求め
卵管に潜り込んで来る

また…赤ちゃん…
出来ちゃう…
やだ…やだあ…

エーテルの詰まった
卵子を受精させ
母体を孕ませるために…

サイカヤ、カグツチ
歴戦のブレイドでも
彼女には勝てなかった

どんなに優秀な
ブレイドでも
彼女には決して敵わない。

一人、また一人と…
敗れていく
ブレイドたち

その芳醇なエーテルの
宿った体と
まだ汚れを知らない
子袋を狙われ

彼女の操る触手に
蹂躪されていた…

彼女たちのエーテルは有限

エーテルが尽き
コアに亀裂が走る…

「マスターブレイド」ではない
「ブレイド」にとって
限りある命を
奪われていくのと同じ

—コアが砕けた瞬間
彼女たちはこの
快樂地獄から
解放される…

はずだった…

コアに戻ったブレイドは「再同調」を促されるとブレイドに戻る

「ハ……ハ……は……？」

「おはよう
大事な苗床さん」

「さあ、始めましょう、
今度はどんな声で
泣いてくれるかしら」

「ひっ何よこれ！
やだ来ないでっ！」

ブレイドたちは
目覚めるとすぐに触手たちの
海に放り込まれる

当然、「凌辱の記憶を失った」まま……

新品のコアとエーテル
そして新鮮な反応
汚れを知る前に
戻った子宮に化け物は
歓喜した

拘束したブレイドから
エーテル貪り
子宮に子種をばら撒く

それはコアクリスタルが
完全に碎けるまで
終わらない「命の循環」

唯一の救いそれは

一度コアに戻ったブレイドは
マスターブレイドと違い
過去を失う……それだけだった……



「勝手に開かれた部屋！
生まれたブレイドたちは
ここへ出産を強要される
ブレイドたちの
淫靡な声が響き渡る

快楽で埋まぬ絶頂を
繰り返され

その隙に濡れ出した
エーテルは光となって
ゆっくりと
天井の光る球体に
吸収されているのがわかる

出産を必死に
耐えるカツチの隣には
今まさに触手の幼体を
出産したばかりのホムラの
姿があった

その種は虚ろで、胎内には
まだ何匹も幼物が
蠢いているのが見て取れる

ニアは出産を迎え
激しい絶頂の
真ん中だった

そしてヒカリのアッコには
胸よりも太い触手が
子宮内部で暴れまわっている

全員お腹に
奴隷の紋章のようなものか
刻まれている

ホムラのお腹から
触手の怪物が生れ落ちた瞬間
お腹の紋章の数字が
変化するのが見えた

その数(566)

それは「出産数」

ヒカリには
「372」の数字が

二人が孕まされ
生み落とした
回数だった



「さっき、苗床部屋の
フレイドの子が何人か
コアに戻ったわ」

「やっぱり
普通のフレイドじゃだめね
ちよっと壊しただけで
すぐコアになっちゃう」

「再同調すれば
全てを忘れ、状況を
理解できず、また
苗床になつてくれるけど…」



「再同調できるまで
コアに力が戻らないと
いけないのは
めんどくさいわ…」

「その点、マスターフレイドは
どんなに激しく犯しても
コアにならない…」



「この日も子種を
注いでるのに
まだ受精して
ないことに…」



「でも、問題もあったわ」

「でも…」

「さすがに気がうが
る…」

「貴方たちの子宮
もう排卵をしてないわ」

「卵巣が機能を停止してる」

「つまりもう二度と
受精することはない」

「ふふふふ
良かったわね
産まなくていいのよ」

彼女が言っていることが
あまりにもショックな内容で
最初は理解できなかった…

でも度重なる
激しい性行為と
数千を超える出産は

いかに私たちが
「天の聖杯」であっても
生殖機能を破壊されるには
十分すぎる
回数だったのです

犯され続け、数えきれない
量の出産をした
生殖器は恐ろしいほど
醜く広がり

触手は卵巣にあった
未成熟な卵子も
次々と取りだしては
受精をさせ
その暴食はいつの間にか
卵巣のエーテルをも
喰い尽くして
しまっていたのです…

もはや子袋が
膈外に出ないように
支えることすら
できないほど
壊されていました

それでも…

希望を…未来を
捨てなかった

まだ受精できる…
愛する人との
子供を…

そんな一縷の望みに
賭けて必死に
耐え続けていた
二人にとって

「もう…産め…
…ない…?」

「よかったわねえ。
これで醜い触手を
産まなくて
済んだもの」

「ああ…この場合、本当に
幸せだったのかしらね…?」

「だって愛する人の子供が
もう作れなく
なったんだもの!!!」

「レックスの赤ちゃんは
私が代わりに産んで
あげるわ!!!」

「貴方たちの目の前でねえ!」

「あはっはっは!!!」

「あはっ!」

その宣告は…
異形を孕み続ける
地獄からの解放

それと同時に
もう、愛する人の
子供を孕むことが
できなくなったという

希望という未来が
潰えた瞬間だった

——必死に耐えてきた
二人の心は——

——女性としての
最後の砦をも
完全に破壊した——

少女たちの抵抗は終わった

触手の蠢く洞窟内では今も少女たちの声が鳴り響く

その奥に二人はいた

触手に囲まれ
全身を白濁に
染められた彼女の
胸には

今もコアクリスタルに
光が灯っている

光は弱弱しく
彼女たちもほとんど
反応がない……

壊れた人形の
ようだった……

触手が再び活動を再会し
彼女たちの全身を
犯し始める

力の失った瞳の奥に
僅かに光が灯る

その表情に
苦しみはなく

快楽に身を委ね喘ぎ声を
奏でる壊れた少女は
どこか幸せそうだった……

女性としての機能を失い
役割を終えた
子宮には今も大量の子種が
流し込まれている